

名古屋の街と博覧会

— 都市発展の軌跡 —



明治43年 鶴舞公園

池田 誠一

【3】関西府県連合共進会…「近代名古屋」の自信

1 共進会

日本の近代化を引っ張ったのは、大久保利通の「富国強兵・殖産興業」策だったといわれます。その殖産興業推進の大きな柱が博覧会でした。

明治11年、政府は第1回の内国勸業博覧会を、東京・上野で開催しました。第2回は14年、やはり上野です。ところが、いつまでも「政府主催・会場東京」では限界があります。そこで地方ごとに行う、「共進会」というシステムを作りました。そして西日本では、16年大阪で関西の府県が連合した共進会がスタートしています。2回目は19年京都。そして奈良、石川、兵庫、…とほぼ3年ごとに開催されました(図1)。

第9回は40年4～5月、三重県の津で開催されました。その最終日。次回開催地を決める時、「次は愛知県で」と要請されたのです。愛知県の深野知事は、期するところがあったか、一切の施設を「主催県に一任」という条件を出して承諾しました。第10回関西府県連合共進会(以降、共進会)は、前回少し紹介したように、この後、議会でのやり取りを経て、40年末には開催に向けて動き出したのです。今回は、この共進会という博覧会を紹介し、その意味を考えてみたいと思います。

2 会場は鶴舞公園

(1) 準備

県も市も、初めての大会だけに準備

は大変でした。まず会場は名古屋市が精進川改修の掘削土で埋め立てた公園予定地(鶴舞公園)一帯に決まりました。市が用地を埋め立てたうえで無償提供したのです。

回次	年次	西暦	開催地	連合区域	開会日数	出品展数	出品人員	観覧人員
第1回	明治16年	1884	大阪府	1府16県	50	7,384	5,929	19,270
第2回	明治19年	1887	広島県	1府17県	40	6,850	5,574	41,464
第3回	明治22年	1890	京都府	2府15県	50	29,745	28,075	94,492
第4回	明治25年	1893	奈良県	2府12県	50	38,154	25,905	101,337
第5回	明治27年	1895	石川県	2府11県	50	35,307	25,459	88,478
第6回	明治30年	1898	兵庫県	2府16県	50	74,951	45,843	294,038
第7回	明治33年	1901	富山県	2府15県	50	64,677	37,855	162,574
第8回	明治35年	1903	香川県	2府16県	50	75,644	47,841	304,065
第9回	明治40年	1908	三重県	2府20県	60	75,902	50,632	779,566
第10回	明治43年	1911	愛知県	3府28県	90	129,766	85,986	2,632,748

図1 関西府県連合共進会の開催状況。
明治40年に三重県で第9回が開かれた

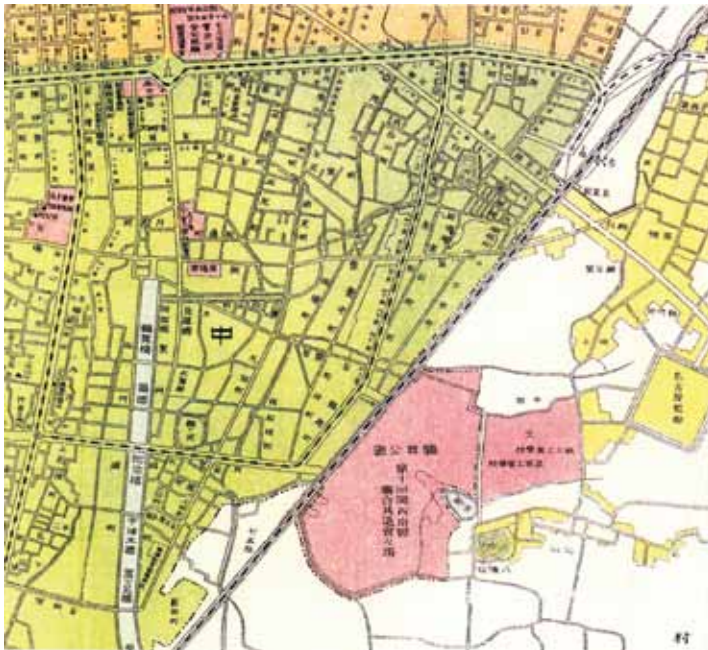


図2 明治43年頃の名古屋の中心部と鶴舞付近。
会場に沿って2点鎖線の市域境(緑色と赤池の鶴舞公園)が引かれている

また、会場へのアクセスも問題でした。埋立地は御器所村の田圃の中、道路はありません。そこで市は、1つはできたばかりの南大津道路(南大津通)の上前津から東に会場へ。いま1つは東部道路(広小路通)の新栄町から南に会場へ、という2つの8間(15^間)道路を新設し、当時路面電車を経営していた名古屋電気鉄道KKも、上前津―公園―新栄町に公園線を新設しました(図2)。本当は、横を走る中央線の臨時駅が欲しかったと考えられますが、これは実現していません。

準備で、もう一つ急がれたのが市域の問題だったと考えられます。市が造る公園やアクセス道路は多くが市域外でした。結果を見ると、42年10月、御器所村と千種村の最小限の区域だけ市に編入されているのが分かります(図2)。そして市域になった埋立地は、翌11月、正式に「鶴舞(つるま)公園」と決定されたのです。

(2)会場

会場は、埋立地9万坪とその東に元名古屋区長だった吉田禄在等から寄付を受けた丘陵地を加えたものになりました。現在の鶴舞公園プラス名古屋大学医学部と付属病院(名大病院)の大部分が入る範囲です。

公園には、市が恒久施設の噴水塔、奏楽堂を造るため公園計画が必要でした。設計は日比谷公園を設計した東農大(現：東大農学部)の本多静六、二つの恒久施設は名高工(現：名工大)の鈴木禎次が担当です。公園は、平坦部は近世フランス

式、丘岡部は日本室町時代式の、それぞれ回遊式庭園とされ、おおよその配置が決定しました。そしてそれらを前提に博覧会の計画が策定されました。

その会場計画を概観してみましょう(図3)。会場はその大きな空間を南北にほぼ東2：西1に区画し、西側が正門前の広場に、東側が会場(有料区域)に設定されました。正門前広場は、正面に噴水、向かって左手には、名古屋城より高い、高さ60^間の展望台付広告塔が建てられました(これは、水道のない時代に、高さ10^間を超す噴水塔の水圧を得るためでもありました)。また右手には、参加府県の売店等が配されました。

正門を入ると、正面は奏楽堂のある広場になっており、右手奥の丘陵地には林の中に貴賓館、その向こうには演舞場が設けられました。左手は広い空間があり、手前に工業品を展示する機械館。特許館が並び、その裏の今

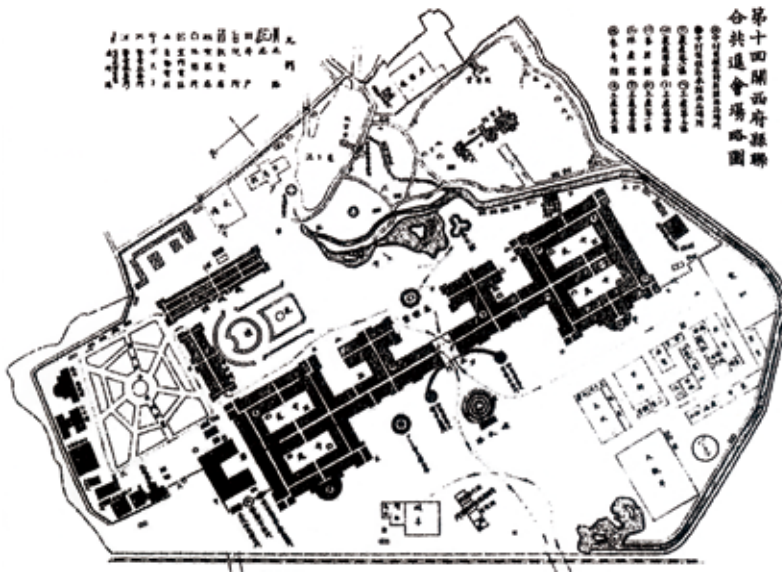


図3 共進会の会場計画。右下方が入口の中央線ガード。中央の黒く大きいのが本館

の名大病院の所には各府県の屋外陳列場が。さらに奥、今の病院の北部に娯楽性の高い旅順海戦館、天女館等が作られました。これらを見ると、全体のスケールは、当時の我が国の博覧会では、トップクラスの規模だったといえます。

(3)開催

43年3月16日。共進会は開会しました。当時の博覧会は、産業振興が目的だったので、目的は各府県の製品の競争でした。このため、部門に分かれて品質審査が行われており、全出品13万点が審査され、1等、2等、3等、が与えられています。この審査では、1等は愛知県が52、東京府49、大坂府37と、主催県の面目を保ちました。

会場で注目されたのは、夜間開場と併行催事です。途中から夜間開場が始まり、各館がイルミネーションを点火して入場者を圧倒しました。また、奏楽堂、演舞場、式場等では連日、コンサートや演芸はもちろん、各業界の全国大会等のイベントが開催されています。

入場客集めのために、博覧会のソフト面でも今日と同じような工夫があったことが分かります。

その結果として、90日の会期で入場者は263万人(1日平均3万人弱)に上りました。当時の市の人口は40万人。その6.5倍の入場者があったことになります。数では大坂内国博や東京博には及びませんでした、

京都内国博の倍を超えるものです。ここに、地力をつけてきた名古屋が、産業博でも三大都市の一角に躍り出ることになったのです。

3 紀行 鶴舞公園①と名大病院

… 名古屋近代化の魁 …

それでは、名古屋初の本格的な博覧会になった共進会の会場の跡を歩いてみましょう。

〈公園正面から〉

地下鉄の鶴舞線鶴舞駅を降り4番出口を出



桂太郎総理大臣筆の「鶴舞公園」の額。
「つるま」と読む

ます。まず振り返ってJRのガードに掲げられた、時の総理大臣・桂太郎(陸軍大将)の「園公舞鶴」の額を見ておきましょう。戦中に供出され、戦後復元されたものです。さて、そのガードを潜って公園に入ります。

共進会に来た人は、ここのガードを潜った所で、広々とした空間の向こうに、長さ500メートル、高さ15メートル程の巨大なルネッサンス風本館を眺めることになりました。正面には大きな噴水があります。そして左手、今は公会堂のある辺りに高さ60メートルの展望広告塔が目を引きました。まずここで「近代」がアピールされたのです。

噴水を廻ってその奥の奏楽堂に向かいます。噴水塔と奏楽堂。この二つの記念碑の中間に正門がありました。中に入ると目の前が奏楽堂になります。回り込んで奥に向かうと池で橋が架かります。鈴菜橋で、形は変わりました。



鈴木禎次設計の噴水塔。現存する



これも鈴木禎次設計の奏楽堂。
一時別の形で復旧されていたが、原形にもどされた



吉田山。金閣寺そっくりにつくられた貴賓館があったが
戦災で焼失し、野球場になってしまった



龍ヶ池。左に名大、右に名工大の建物が見える

たが当初からの計画です。右に池を廻ると、南側に小山が見えます。今は吉田山と呼ばれる野球場ですが、当時はその上に京都の金閣寺そっくりの貴賓館が造られていました。その左奥は、演舞場とピヤホールです。

山裾を左に、季節外は水のない池を廻って上の龍ヶ池に出ます。ため池が改修されたもので、浮御堂の向こうの水面には名古屋高等工業(名工大)が池に白い校舎を写していました。池の左側を進むとバス通りで、T字の交差点です。当時はもちろん道路はなく、この付近に、植民地の台湾館と開会や表彰を行う式場がありました。

〈名大病院へ〉

北に交差点を渡ると名大病院です。この広い附属病院と医学部の敷地のほとんどは共進会の会場でした。後に名古屋大学医学部の前身の愛知県医大用に売却されたものです。病



東南角から北をみた名大病院。
広い病院も、共進会会場だった

院の東側の道を進むと、坂を下った所に名古屋大学医学部の現在の正門があります。この辺りまでが会場でした。中に入りイチョウ並木の道を進みます。この付近には旅順海戦館、天女館？などの業者が運営する有料の娯楽施設が並んでいました。医学部の複雑な通路を、やや左寄りに抜けると医学部の西門です。目の前の中央線は、当時は土手の上を走ってい



名大病院に隣接する名大医学部の正門。
イチョウ並木の辺りに旅順海戦館があった



名大病院西門から南を見る。
右手の中央線は木曽地方が工事中で物資が輸送中だった

ました。残念ながらまだ木曽地方が工事中だったためでしょう、駅はできませんでした。が、千種駅まで向かった人が結構あったようです。

線路に沿って、バス通りを渡り鶴舞駅に向かいます。33ヵ所という会場は、名古屋市内で開かれた博覧会でも最大のものでしょう。改めて、当時の人の気迫に圧倒されるような思いがしました。

4 名古屋「近代」の自信

共進会は、名古屋が産業でつけた力を博覧会という場で発揮し、広く全国にアピールすることになりました。そして名古屋の近代化も大きく進んだのです。

この博覧会を見込んで勝負に出た人がいました。伊藤呉服店(松坂屋)の伊藤祐民です。共進会開会10日前に、栄町の角に新しいデパートメントストアをオープンさせました。外観もルネッサンス風のその店は、正価販売、陳列方式、土足入場等、全く新しい近代店でした。開場以来多くの人を集め、ここでも共進会とタイアップして名古屋の街の近代化を進めることになったのです。

名古屋市の明治40年代は、激変の時代でした。熱田町との合併。名古屋港の開港。精進川の改修。鶴舞公園の整備等々。共進会は、当初の期待通り、名古屋の東南部に光を当て、その可能性を引き出すことになりました。

〈主な参考文献〉

- ①「第10回関西府県連合共進会事務報告」
(1911、同事務所)
- ②同編さん委員会『愛知県史・資料集25』他
(2009、愛知県)
- ③同編集委員会『新修名古屋市史・資料編近代1』他
(2006、名古屋市)
- ④井上善博『名古屋絵はがき物語』 (2009、風媒社)